



「鉄」という愛すべき素材、その魅力

建築の構造は、木造、鉄骨造（重量鉄骨）、鉄筋コンクリートの3種類が代表的ですが、LGSシステムなどの「軽量鉄骨」は、さきほども言いましたように、いわば第4の建築構造です。重量鉄骨は6～9mmの厚みの鉄材を使いますが、軽量鉄骨は3.2mmの鉄板を加工します。そもそも鉄／鋼材は、近代を代表する素材です。その精製や加工には大規模な機械設備が必要になりますから、国家が大事業を起こすための素材というイメージがあります。官営八幡製鉄所が、石炭を生成したコークスで「高炉」を動かし、日露戦争の需要にこたえるようになるには、大変な国家的苦勞が伴っていたのです。まさに重厚長大。鉄はかつて、そんなに庶民的な建築材料ではありませんでした。しかし、日本中が焼け野原となった敗戦後やその後の経済成長期の住宅需要のなかで、ハウスメーカーによる軽量鉄骨システム工法が何種類も開発されました。それまで日本の住宅建築は、現場で大工さんや左官屋さんが行う、現場施工、「湿式」の工事もっばらでした。野外の現場作業に負うところが大きいので、当然、品質にばらつきが出ます。職人のその日の気分や体調で、工期や出来栄えに差がつくのです。人間的でいいじゃないか！とも言えますが、品質基準や安全基準が年々高まっていく時代でしたから、それでは対応できなくなりました。

そこで、あらかじめ工場で管理した一定の品質の主体構造で建築するという発想が一般化します。この現象を「プレファブ리케이션」と呼びます。それが略されて「プレハブ」と呼ばれるようになりました。

この現象は、いまアジアの新興諸国の住宅建築の分野では始まっています。この分野では、日本国は50年以上も先輩なのです。

「プレハブ」のパラドックスと日本人の性向

そのように、「プレハブ」とは本来、前近代的な現場作業の欠点を補って建築の製品精度を高めていくという意味なのですが、なぜか、日本においては「廉価版」（れんかばん）的な印象の言葉になってしまいました。

木曾の檜や秋田杉を頂点とする、日本人の木（銘木）に対する、あこがれと愛着と見栄の序列。また「手作り」という言葉が放つ、「まごころ」的イメージと、それに思わず共振してしまう日本人独特の感覚と先入観。それら日本人特有の心性が、「プレファブ리케이션／プレハブ」の言葉の

本当の意味を曇らせているのかもしれませんが。また、一つには、プレハブの製造施設をつくることのできるの、やはり大企業に限られているため、どこかしら利益優先の「ところが通っていない」というイメージが付与されたのかもしれませんが。ニッポンは判官びいきの国なのです。

軽量鉄骨システム住宅は、合理性のイメージを隠して、「和風」を強調するに至る

困った各住宅メーカーは、出来上がった合理的なシステムに、わざわざ「和風」の屋根を載せたりして、「プレハブ」感を除去することに努める始末でした。当時の開発担当者は、なかなか悔しい思いをしたと想像できます。それは、できるだけ品質の管理された良質のものを、広範囲に供給しようという、それも一つの「ものづくりの情熱」であったからです。しかし結局、本来のプレファブ리케이션の意味は、忘れ去られ、ユーザーの意識と建築システム開発の間には、常にギャップがある状態が横たわっていることは、今でもさほど変わっていません。

大企業独占の「プレファブ리케이션」システムを一般化することが、LGSシステムの真骨頂なのです。

現在の、日本の住宅建築の状況は、今まで見てきたような「プレファブ리케이션」という観点から見ると非常によく理解できると思います。つまり、現場主義による製品精度のばらつきをできるだけ無くし、骨組みなどの重要な部分は工場で品質管理する必要があるということ、それを反映するためにいろんなメーカーが登場し、様々なバリエーションを提案しますが、基本はすべて同じです。

しかしながら、軽量鉄骨のシステムを工場ラインで製作するということは、巨大企業にしかできません。そこが、残念な課題として残っているのです。いわゆる「プレハブ」特有の「画一化」という側面も否めません。

一方で、LGSシステムは、一般に販売されている「Cチャンネル」という、3.2mmの鉄材で加工していくシステムですから、かなり自由でフレキシブルなシステムです。いわば、街の鉄工所で製作ができる「プレファブ리케이션」システムなのです。「鉄」や「製品管理」の長所のみを抽出して、身近な建築に取り戻すための工夫が満ち溢れている、いわば、「ローテクの高品質」それがLGSシステムの本質なのです。



1999年に完成したLDKオフィス。現在もいくつもの時代を超えて原宿に生きている初代LGS。建築物が社会的な存在であることを強く認識させてくれる。